



き

っかけは、講演依頼だった。塾の主要な活動の一つに活活寄席(いきいきよせ)がある。大人向け教育・文化セミナーをちよつとふざけてこう名付けた。塾の柱は当然授業なのだが、ずっと塾生がゼロかその近似値付近なので、必然的に活活寄席の方に注力する状況である。セミナーの講師候補をあれこれと考えていたときに浮かんできたのが本通信で何度も執筆してもらっている天野和子さんだった。いつかチャンスがあったら塾の保護者や子ども対象に読書会をやってみたいと思っていたので、ライブラリアンとして読み聞かせなども熱心にやっている天野さんに読書会の勧めなど話してもらえないかと打診してみたのである。

天野さんには、今は忙しくてとても応じられない、と断られたのだが、やりとりしている中で、児童文学の古典の話題になった。そこで、セミナー講師の代わりに、おすすめ名作古典を紹介する文章を書いてもらえないか、と頼んでみたら、それならできるかもしれないという回答だった。「大人が読みふける児童文学」というタイトルも決まり、オリジナルの挿絵もめどがついたところで送られてきた第一回の原稿で取り上げられていたのは、エーリヒ・ケストナーの『飛ぶ教室』。名作児童文学としてその名はずつと前から知ってはいたものの未読の作品である。これぞご縁な

り、読んでおかねばと図書館に行ったが、岩波少年文庫のそれはあいにくの貸し出し中だった。結果それが幸いし、その足で本屋に行ったら、池内紀の新訳が新潮文庫から出ていた。何だか運に恵まれている気がしてきた。

一気に読んだ。あまりに有名なために、知っているような気がして未読のままではいるのはいかにも残念、ぼくはこの欄で再三書いてきたのだが、この本もまたそういう一冊だった。もつと早くに出合いたかった、というのではなく、危うく読まずに死ぬとこだった、という意味で。

天野さんは、次もケストナーを取り上げた。『ふたりのロッテ』。これもまた題名は知りながら未読。図書館で借りて読み始めたら、頁措く能わずだった。少しだけ、泣いた。

さて、この「大人が読みふける児童文学」シリーズは、月一回ペースで連載してもらおう予定だ。「松江算数活塾」で検索または、<https://katsujuku.net>を入力していただければ新装なった塾のホームページで読むことができる。今はまだ「飛ぶ教室」のみだが、来月下旬には「ふたりのロッテ」、その先にもとびきりの作品が控える。読書の秋、大の大人が読みふける児童文学はいかがだろうか。

空き家 23

## 木幡智恵美

生家の思い出⑩

家の暮らしに次第に慣れてくると、学校生活にも少しずつ馴染んでいった。言葉は出雲弁になっていき、一緒に教室移動したり休み時間に話したりする相手もできていった。

ただ、困ったことがあった。給食だ。泉南の小学校は弁当だったので、私にとつて初めての経験だ。まず、脱脂粉乳が不味かった。それと、コッペパンは大きすぎ、食パンは枚数が多すぎた。おかずは好きなのもあったけど、サラダにミカンや干しぶドウが入っているのは鼻をつまんで食べた。厄介なのは、給食を食べた後、毎日のように下痢をするところ。あまりに頻繁に下痢をするもので、一度医院に行つて診てもらった。その時は、「腸が長いですね」と言われて納得したが、後で考えてみると、腸の長い草食動物の羊などはポロポロのウンチをする。野菜好きだから草食動物系なのは確かなのだが、下痢の原因は分からずじまい。そのうち下痢は減つていったから、馴染みのない食事に腸がびっくりしたということか。

次に困ったのが、体育の授業でやるバレーボール。皆小学校の部活動で経験しているのでボールの扱いがうまい。泉南では部活動などなく、放課後校庭でドッジボールをして遊ぶことはあつても、バレーボールなど触ったこともない。クラスメイトが休み時間に教えてくれ、従兄にもらつたバレーボールを屋根に放つてレシーブの練習をした。ついでに運動について言えば、小学校の頃は幼児期に心臓が弱くて医者通いをしていたので、学校から来る健康調査票にそのことを書き、体育で長距離走があるといつも見学していた。ところが、中学校で健康診断をしたら心臓など悪くはないとのこと。そこで、スポーツテストの際、初めて長距離を走つたところ、息苦しいのなんの。完走できずじまいだった。

あと、面食らつたのは冬のダルマストーブ。泉南では、低学年の頃教室の隅に火鉢が置いてあつたのを覚えている。校舎が新しくなつてからは石油ストーブだった。冬が近づいたある日、新聞を硬く丸め針金で締めて持つて来るように言われ、何だろうと思つたら、ストーブの焚きつけだった。それを油に浸して使うのだ。日直が毎朝、石炭の山からバケツ一杯分の石炭を運ぶのもびっくり。スクールバスの早便の時は、ストーブに火を点ける役を担つた。

30代フリーター 内閣改造と自民党の役員人事について「何をやりたいのかわからない人事」と、高安健将という政治学者が朝日新聞でコメントしていた(9月14日朝刊)。

年金生活者 そんな政権が支持率を落としたながらも続いているのは、国民自身が「何をやってほしいかわからなくなっている」からかもしれない。

30代 国民はいつだって暮らしやすさ、働きやすさを求めているだろう。

年金 それを実現するために政治に何をやってほしいのか、それがわからなくなっているのではないか。

かつてなら「やってほしいこと」は明瞭だった。つまり経済を成長させることにそれはほとんど尽きた。それは自民党の保守本流政権による軽武装・経済優先路線によって現実のものとなった。高度経済成長を経て暮らしやすさ、働きやすさは格段に進んだ。あす食べる物を心配しなくて済むようになっただけでなく、家計に占める選択的消費が必需的消費と半々になるくら

だった自民党に加えて、野党も「多様」になり、今や「多弱」と揶揄されるまでになった。

30代 山崎元という経済評論家が今の日本の政治は「驚くほどつまらない」と批判している(9月20日ダイヤモンド・オンライン)。

年金 たしかにつまらない。おもしろくない。岸田政権になってとりわけそれが顕著になった。

政治は娯楽ではないのだから、おもしろさを求めるのは見当違いだという考えもあるだろう。だが、ちつともおもしろくない選挙に、わざわざ投票所まで足を運ぶ有権者がどれだけいるか。政治にはエンターテイメントの一面があるからこそ、大勢の有権者が関心を持ち、一票を投じに出かける。米大統領選のにぎわいぶりがそれを物語っている。

政治がエンターテイメントになるのは、それが争い事だからだ。多くの映画やドラマが人や集団の対立や葛藤を描いているのを見れば、それは納得で

いに拡大した。

その結果、国民は選択的消費を控えることによって、当面の生活に困ることなく、経済を停滞させ、時の政権を倒すことのできる潜在的な力を手にした。それは国家の権力の一部が個人に分散したことを意味する。言い換えれば、国民はかつてないほど自由を手にした。だが、時代を画するこの大きな達成のあと、国民は次に政治に「やってほしいこと」がわからなくなった。

30代 内閣支持率が低迷しているのは、「やってほしいこと」があるのに、それをやらない政権に国民が不満を募らせているからではないのか。

年金 「やってほしいこと」はあるのだが、それが人や集団によってバラバラで、かつてのように国民の大多数が一致して「やってほしい」と望むことがなくなったと考えるほうがより正確かもしれない。

1964年の1回目の東京五輪、1970年の大阪万博は、日本国民の大多数が一致して高度経済成長を望んだ

きるはずだ。ところが、圧倒的多数の与党と「多弱」の野党から成る今の永田町は本格的な対立も葛藤もない。

30代 安倍政権の時代にはまだそれがあった。

年金 あの政権は、選択的消費の拡大によって国民に分散した国家の権力を回収することを最大の使命としていた。憲法改正を最終目標に置きなが

時代の象徴的なイベントだった。これに対し、2021年の2回目の東京五輪は前回ほど国民的な熱狂を誘わず、2025年の大阪・関西万博に至ってはまともな開催さえ危ぶまれている。この差が、かつては明瞭に存在した「やってほしいこと」が今は不明瞭になったことを示している。

個々の国民、あるいはその所属集団や階層に目を向ければ、様々な「やってほしいこと」があるだろう。しかし、それらは国民が一致して望むことではなく、それぞれの立場や環境に応じて多様であり、また利害がぶつかり合うものも少なくない。

この「多様化」は、国民が望んだ高度経済成長の結果でもある。選択的消費の拡大で国民の欲求も様々になり、政治に望むことも一様ではなくなった。

資本主義を擁護する自民党と社会主義を掲げる社会党との間に成立した55年体制が崩れた背景には、そうした「多様化」があった。もともと「多様」な考えの持ち主の寄り合い所帯

ら、集団的自衛権の行使を一部容認する安保法制の制定を強行したのは、それを実行に移したものだ。そこに対立、葛藤が生まれた。

30代 岸田政権には使命などおおよそなさそうだ。

年金 すでに多くの国民が政治にあまりエンターテイメント性を求めなくなっている。楽しみはほかにくらでもある。高度経済成長を経て出現した消費社会とインターネットの普及がそれを可能にした。

エンターテイメントに限らず、様々な分野において政治に頼らなくても個人や企業の手でできることが増えている。その最大の例をあげると、かつて第2次産業中心の時代には産業のインフラ整備を国家にしてもらわなければならなかったが、第3次産業中心の現在はその必要が大幅に減ったことがある。

政治の役割は相対的に低下し、国民はかつてほど政治に期待しなくなった。内閣支持率の低迷が岸田おろしにつながらない理由のひとつがそこにある。

ニュース日記 893  
中村 礼治

## おもしろくない政治